

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 29 年 6 月 2 日現在

機関番号：12301

研究種目：基盤研究(C) (一般)

研究期間：2012～2016

課題番号：24593286

研究課題名(和文) 乳がんサバイバーと家族員が生活の中で治療を継続するための相互支援モデルの開発

研究課題名(英文) Development of a mutual support model for breast cancer survivors and family members to continue treatment in their lives

研究代表者

二渡 玉江 (Futawatari, Tamae)

群馬大学・大学院保健学研究科・教授

研究者番号：00143206

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 4,000,000円

研究成果の概要(和文)：初期治療を受ける乳がんサバイバーの支援に活用することを目的に、サバイバーと家族との関係性をアセスメントする家族支援尺度を開発した。尺度項目は、国内のがん患者と家族との関係性を示す文献検討と初期治療を受ける乳がんサバイバーが家族員との関係性を育むプロセスをインタビューし、質的記述的に検討した。さらに、乳がん看護にあたる専門家会議で内容の適切性を吟味した。作成した尺度について、信頼性・妥当性の検討を行った。今後は、臨床活用に向けた検討を行う必要がある。

研究成果の概要(英文)：We developed a family support scale to assess the relationship between survivors and their families with the aim of making use of the breast cancer survivor receiving initial treatment for support. The criteria item examined literature showing the relationship between domestic cancer patients and their families and interviewed the process of breast cancer survivor receiving initial therapy to develop relationships with family members and examined it qualitatively. Furthermore, we examined the adequacy of the content at the expert meeting on breast cancer nursing. Reliability and validity were examined for the scale that was created. In the future, it is necessary to study for clinical application.

研究分野：医歯薬学

キーワード：乳がん サバイバー 家族 援助モデル

1. 研究開始当初の背景

乳がんは年々増加の一途を辿り、乳がんサバイバーとその家族も増加している。本邦におけるがん全体の5年生存率が54.4%であるのに対し乳がんは85.5%と長期に生存できること、診断後長期経過後の再発がみられること、発症年齢が欧米に比べて低く45~50歳にピークがあること、治療の複雑多様化に伴い治療期間が長期化しているなどの特徴がある。40~50歳代は、女性、母親、妻、嫁、社会人など最も多くの役割を担う年代である。多重役割を抱える女性が乳がん罹患することは、患者のみならず共に生活を送る家族にも多大な影響を及ぼす。さらに、乳がんは治療が長期にわたることから、乳がんサバイバーと家族員は、様々な問題に直面する闘病プロセスの中で、家族機能を変化させながら対処していかなければならない。

Hanson(1996)は、家族は患者の影響を色濃く受け、また患者に影響を与えている存在であると述べている。また、家族は主体的な存在であり、家族自身の力で様々な状況を乗り越えることができる集団である(野島, 2006)こと、患者も患者であると同時に家族を構成する一員であることから、がん直面した患者及び家族の支援を行うには、患者を含めた家族システムそのものをエンパワメントする必要がある。

研究者はこれまで乳がん看護外来において、乳がんサバイバーが、再発の脅威にゆれながらも、治療を継続する中で、母親、妻、嫁としての多重役割を必死で遂行しようと努力している姿をみてきた。しかし、中には家族の理解が得られず、自分自身の存在価値を見失う体験をしている患者の看護を経験してきた。乳がん患者が治療を継続するためには、乳がんとともに生きる体験を家族全体の体験として共有し、お互いの存在意義が確認できることが重要である(山

手, 2010)。このことは、乳がんサバイバーが治療と生活を両立するためには、家族員が病気や治療に関する状況、それによって生じる生活への影響、家族役割の変化について十分に理解し、患者-家族間で合意形成することの必要性を示唆する。

家族機能の脆弱化が指摘されている現代において、がん罹患という危機に直面した患者と家族員がその経験を共有することで同じ目標を持ち、相互に支え合いながらがんに向き合うための支援を行うことは、がんと共に生きることを支える上で重要である。

2. 研究の目的

本研究は、乳がんサバイバーが治療を継続しながら社会生活を送るために、家族員とどのように病気や治療に伴う家庭・社会生活への影響・家族役割について合意形成をしながら、生活の再調整を行っているのかという実態と影響要因について質的帰納的に明らかにする。それを基に乳がんサバイバーと家族員相互の支援関係が把握できる家族相互支援関係尺度を作成する。さらに質的研究結果から、乳がんサバイバーと家族員が治療を継続しながら社会生活を送ることを支援するための支援モデルを開発する。

研究目的を達成するために、以下のように段階的に研究を実施した。

(1) 乳がんサバイバーの家族員との関係性の現状調査

研究課題に関連した文献的考察から、乳がんサバイバーの家族員との社会生活上の関係性を明らかにする。

乳がんサバイバーが治療を継続する中で、夫との関係性をどのように育んでいるのか質的・記述的に明らかにする。

さらに抽出された内容から、家族関係を促進するもの、阻害するものなどの分析を

行い、文献的考察および専門家の意見を踏まえ、尺度の要素を抽出し、尺度原案を作成する。

(2) 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

質的研究の成果をもとに、尺度原案を作成し、がん看護専門看護師を含む専門家会議で検討・精練する。

尺度原案を乳がんサバイバーに依頼して信頼性・妥当性を検討する。

3. 研究の方法

(1) 乳がんサバイバーの家族員との現状調査

医学中央雑誌を用いて、がん患者と“関係”、“受容”、“関係性”、“相互作用”と“がん”、“患者”、“家族”をキーワードとして検索した40件の原著論文を研究対象(2002~2012年)とし、家族との関係性を示す記述を抽出し、内容分析の手法を参考に分析した。

初期治療を受ける乳がんサバイバー12名を対象に面接調査を行い、M-GTAを用いて分析した。

(2) 尺度の作成と信頼性・妥当性の検討

(1)の現状調査の結果をもとにがん看護専門看護師、乳がん認定看護師を含む専門家会議で検討し尺度原案を作成した。

初期治療を受ける乳がん患者20名に調査を行った。信頼性のうち内的整合性は、クロンバック係数を用いた。妥当性のうち、基準関連妥当性はSF-8およびFamily Relationships Index(FRI)日本版に基づいた家族関係尺度を用いた。さらに弁別的妥当性を検討した。

4. 研究結果

(1) がん罹患した患者と家族における関係性に関する文献の内容分析

2002年~2012年までに日本国内で掲載された、がん患者と家族の関係を示す40論

文からがん罹患が両者の関係に及ぼす影響の認識について明らかにした。内容分析を行った結果、がん患者からみた家族との関係の内容として、【家族の思いや行動、存在から生ずる満ち足りた思い】【存在意義を実感する】【家族の思いを受けて前進する】【家族の思いに隔たりを感じる】【家族の態度や行動に対する満たされない思い】【家族との関係の変化に思いを巡らせる】【家族のことを気遣う】【家族内での役割遂行への願望と移行】の8つのカテゴリに分類された。また、家族からみたがん患者との関係の内容は、【患者を思いやり、支えたいと願う】【患者の存在意義を感じる】【患者の存在に支えられる】【患者を支えることが重荷になる】【患者への思いに葛藤する】【患者のための環境づくりをする】【患者の役割を代行する】の7つのカテゴリに分類された。患者と家族の間には感謝や愛情という強い思いがあり、それが相互作用することにより、関係が支えられていることが示唆された。反面、お互いの存在意義を実感するにも関わらず、気遣いや負担を感じることから関係が不安定なものになり得ることが明らかになった。

(1) 乳がんサバイバーが治療を継続する中で、夫との関係性を育むプロセスは、『治療に臨むために共通認識を持つ体験』、『治療による困難に身を置く中で夫の存在を実感する体験』、『命と女性らしさの価値観を認め合う体験』によって構成された。『治療に臨むために共通認識を持つ体験』は、夫と治療開始に伴う苦悩を共有し、夫の後押しによって術前化学療法を受ける意思決定をしていた、夫がいつも通りに振る舞うことを心強く感じることに支えられていた。夫と今後の生活や治療の共通認識を持つことで、患者が術前化学療法をやり抜こうという思いに至った。『治療による困難に身を置く中で夫の存在を実感する

体験』は、術前化学療法による副作用が生活に影響する中で、生活と治療を両立できるように夫から心身のサポートを受けていた。これを通して、【夫への信頼が深まり】、治療に専念できるようになるという【治療継続への意思の強まり】に至った。さらに、夫への信頼が深まることで、夫との心の距離が近づく という関係性が深まっていた。『命と女性らしさの価値観を認め合う体験』は、乳房喪失とそれを失うことで永らえる命という2つの価値観の中で揺れ動きながら自分の優先したいことを見だし、それを夫が理解していることを知るという【価値観理解による後押し】によって術式決定に至っていた。夫への感謝の気持ちが一層患者と夫との関係性を深める要因となり、【絆が深まる】プロセスであった。

以上は、乳がん患者が治療を継続していく中で関係性を育むためには、診断初期から両者がお互いの思いを確かめ合えるような関わり、夫の支えを実感しながら、信頼を深めていくための支援の必要性を示唆する。

(2) 作成尺度概要

尺度は、初期治療の経過に沿って、がん診断時、手術治療選択時、補助療法選択時とし、病气診断前の関係性の項目から構成された。20項目4件法で、得点は20点から80点に分布する。

(2) 信頼性と妥当性の検討

信頼性のうち内的整合性には、クロンバック係数を用いた。その結果、係数は0.74 ($p < 0.05$)であった。外的基準としたSF-8とは正の相関を示す傾向がみられたが有意差は認められなかった。また、弁別的妥当性は、高得点群は低得点群に比べ、SF-8得点が有意に高かった。特に家族関係性と密接に関連する日常役割機能(身体)、社会生活機能の項目で有意差がみら

れたことは、本尺度の有用性を示すものである。今後はさらにサンプル数を増やし検証を行い臨床活用に向けた体制を整える必要がある。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計1件)

鈴木(浅見)優子、堀越政孝、千田寛子、二渡玉江：がん罹患した患者と家族における関係性に関する文献の内容分析，群馬保健学紀要 33：47-57，2013．査読あり

〔学会発表〕(計1件)

鈴木(浅見)優子、渡邊恵、堀越政孝、塚越徳子、二渡玉江：初期治療を受ける乳がん患者が治療継続する中で夫との関係性を育むプロセス，第40回日本看護研究学会学術集会，奈良県奈良市，2014．

6. 研究組織

(1) 研究代表者

二渡玉江 (FUTAWATARI TAMAE)
群馬大学大学院保健学研究科・看護学講座・教授
研究者番号：00143206

(2) 研究分担者

堀越 政孝 (HORIKOSHI MASATAKA)
群馬パーパス大学保健科学部・看護学科・准教授 (2017年4月～)
研究者番号：80451722

中西 陽子 (NAKANISHI YOKO)

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・看護学科・教授
研究者番号：50258886

広瀬 規代美 (HIROSE KIYOMI)

群馬県立県民健康科学大学・看護学部・看護学科・准教授
研究者番号：80258889

萩原 英子 (HAGIWARA EIKO)

群馬パーパス大学保健科学部・看護学科・准教授
研究者番号：40438776

(3) 連携研究者

浅見 優子 (ASAMI YUKO)
群馬県立県民健康科学大学・看護学部・看護学科・講師
研究者番号：50774345

(4)研究協力者

廣河原 陽子 (HIROKAWARA YOKO)

群馬大学医学部附属病院・看護部・副師
長、がん看護専門看護師

福島 加代 (FUKUSHIMA KAYO)

伊勢崎市民病院・看護部・主任
がん看護専門看護師